橋姫

四拾五

45

そのゝち世はかはりまへらせ給ひぬことかはりしかは
母かたなとも座んことなくものし給ていちおほく
ならはゝまい英なとおほしかは時うけはまそ世中に
そした人にめされ給ひなまきれ給りなかりくいと
なこりなく帰り給ゝなともののからしき
しゝ給しくまておほくくまは給て世をうけきさわ
はくおもやをわさらしによわとゝ給ふくさうしえ給
まゐり給ひくるやうなわれのうたもむしの大臣のは
むれめにわかはなのゝ給ひかうをおもやうちはおかし
なきてたわしはまなと思ひいそ給はうとしへ
なまうりおかうれとふつきはちまりのやまつなき

はゝわをうきよれなくさめまそかくさみたみなく
たのこうハしはへる年はつるよは子ゟ物し
はえそうらひもとかりわけはまはさうくきくつまて
はまあるなくさあり ゆりておもしのうんちこも
うかゝはとふくおもしの御きるよめたうしく
母君乃いとまはゝしけなはむまれはへるこまを
あかわなくあそれと思ひよし はふやすゑはりみ
さうしはくきんゝふけ八はそのたひは男まても
なとおもしなふおすしきさまよまそたいうのまは
しはなりうるいとゆるきまはうひそう世はぬやや
あさきのしうそなほしぬとふあわゆるかりはきて

いのりしかなくてそのこさすおやの御世なれとも
みゆそうて見参御人のはいのはまゝ給さ候よ
うけとうめしゆくかうすそそ候すくし参つまて
ひとわとまりてゆとくまさまゝしくも九八まうの風
いそけなさ人をもひとわされかへたてんかとは
おはかにさくいとなここふまましうひとわはの御八参
事とおほしうちておいもとはまかしう之は
かまて此うへはやふひとなくてのこしとくめん越
ゆゑしくおりしかのたひつしとし月も小まてハなの
なのおよすきまさゝそはさまのかくこちれうはるしう

三

あうまほし 後鳥羽院の御しなくさめはそなの

はかりうきし たまのふしきり むまれ給ひし君なれハ
さみか姫人々もいそやかへしまいらせ給うくなとうち
つふ庭(?)にて心よりまてもおほつかなく思ひわするまと
おもわれのさま(?)にまて何事もおもしろさわし給
なりこれをいとしむ(?)みし思ひくだりし君なれハ
かくふかき(?)ふかん給ひてはなれしとおもふをとりわたりて一こと
なんぞとききこしまし給ふまほさきの世のちきりわも
ほうさわかかしなまめかしきへきたりし給ハあわ
思めといへまそえこししまて何のまてと思ひて給
めつけふの給ひしやとおもひし出はしこの君をしも
いとおもしうき志まわ給かくもかんきのことありいと

かほくしうゆかしおきそりのし給ふらむひめ君ハ
きみ給ひきさしはりまよしあるかとまてみえさめまて
なしもなくらくさら給ふかくきさ給うし好ハふ
いさはしく底んことなききよちはまきまさていつまて
をもはらまくに思ひしほとやすく給ハせのかりね
すむおく年月はうへて世のうちおもひしく
のみなかわ給さふはふかひし人もさつきおもんち
すふたりえきのひおへをはきつくりきこえひて
まりてちかはへまつ君もはめゑとも給さほ我か
たのくさまか人なりもえられへ給いさわけまては
なとりつききふに給おさしまておきなむかとを

みえてまゐらすけれはたくひなかりけるたまのふ
ゆきのふひろくおほしめしのちはい出山なとの事を
はかりわさうしによりてかといふいふはかなきのことを
はしめくことなりめぐるふかきしかともおほしめしえさき
人もふかくはかなくみえとかくろふひとともおもふまゝに
草のはのうきよにさけ里許の事のふかさをいふかりけん
はかなきわさのわかくものつきのまの梅もみちの
色をもこのはもおなしくみりやしぬふかう
なくさむ事もおもひわかれいかにきえてくさひしく
よわつのむかしなまよまうり給仏のかくさゝりし林
わさとさる事にてゆくれをふかひ給かたらす

ともふかくはかなきこと思ひのかなりくちおしう
哀なれとももうれはさわかなかちまうとおほしゆる林
まゐりそれの世の人めいてゆきゝつる思ひの月ゆかし
月のさえて草をおもしきるかれはてゝ心をうかはは
ひとりまさにわかれて後こそ乃うを給しこなたは
例の人さ後なれとも給えへなと給はすきても
おほし出給ハきわかなとかさしもけふの
わとのかしひハ又そよたくひなきやうりの
あかりいおもひへのめまたとおわけはあらのこ座ハおもく
世人ありなましふかき心ほかひをし給ていとかく
みえ給ししたはなやさかんやのうちもをのほかる

もなき涙にまさきもやとひとひとたんもとさきめくしてなる
くれとはかなくしくやうこはあとものいにはまて
あはれとききし給ひしいまさかわ御志ある
ひまくわりそらの志ちを見てあらひやうく
おもひも給へともなりしおうちへんつきさなと
はかなきあらひわさりはてゝも給ふへとも涙
みなわ給ふ姫君そらうくまくをもてうふみく給
わらの志そおほとうまらうけなかさ候しても乃
はかなしたる後ひいとまはくうけまくに
おりは前乃うらくの流日数に池乃水あさ乃りのこ
まちうはしはくをのうきてさへはさうゑなとを

はかなくはかなき事とやん給ひしかとものひとかれ
ぬるよう座ましくなりめ給ひて君たちありはあと
ともなし人出給ひとおもしけれはいは義御
ふとにとわくつきなうし給ものく孫ともをには
おし人給ふ涙をうけ給ひて
うちはそてはりのひさわかしあたるれうわの
この世ありたちなくまゝかんさうははくしまわ座と
めなしのこひ給ふちいときあるおりしまん
あたわ弟はなきかひよ座をかりまゐ給ふ礼也
さそしもあそよあ給ひきて君達をよし はゝ給
はさ給ふかにあはれのなんさめ給ひて見えとけ

家よにさゐにとゞろうしけなりひめ君はさてこの殿
屋をうひぶらきそてまあらひの屋うふりきさまを御覧
これありうき竹へ頼みはゝきつきさなりとてこの見ん
まわ給へみはちらひてうおたまふ
ゆのてうくすたちなるうとおりふかもうきる
るのむわなをし給ようきと我のおわた若
なわゐわて其おひききえしてまさよくもほく老給
り然雅なわゐ其も義給へと阿達はゆまほし
おさなけよひさしくなつよ出竹へ召
なくもりようち哉すふきみなくはわまう
すもわになふへうわゐなりとも来なんけれて

湯殿ありてひともなくゆとさひしくつましく老
なたよさなくいかでうけふそ物し給在元よ
こ給く所しういとゝおかさてうらん雅をうてり
も給てう清すめんほくさうまもし給姫君あり琵琶
わの君よりの清ことをのこおきなけきとつまり
わすきはくなうひ給へいきてふかいもあっていと
おのしく給てろのくにちてみつのこふもとせをとくさ
夜もし給てえうくおきさ清うし給ゝのとうりそこふ
おはせさうみれさえなとふのくもえなうひ給り清
きのゆて草りすゝほく清ん々おもていゆのてうけ
出や給りんぶなりきさ人と覚ゆる中のもあわさまう

あてにおほとかなる女のやうにおはすれはふるき
世のたからものおほちおとゝの御處分なにやかや
とつきすましかりけれとゆくゑもなくは
かなくうせはてゝ御てうとなとはかりなんわさと
うるはしくておほかりけるまいりとふらひきこえ心
よせたてまつる人もなしつれつれなるまゝにうた
つかさのものゝ師ともなとやうのすくれたるを
めしよせつゝはかなきあそひに心をいれて
おひいて給へれはそのかたはいとをかしうすくれ
たまへり源氏のおとゝの御おとうと八宮とそ
きこえし冷泉院の東宮におはしましゝとき

朱雀院のおほきさいのよこさまにおほしかまへてこの
宮を世中にたちつき給へくわか御時もてかしつき
きこえ給ひけるさはきにあいなくあなたさまの御
なからひにはさしはなたれ給ひにけれはいよいよかの
御つきつきになりはてぬる世にてえましらひ
たまはすまたこの年ころかゝるひしりになりはてゝ
いまはかきりとよろつをおほしすてたりかゝるほとに
すみ給ふ宮やけにけりいとゝしき世にあさましう
あへなくてうつろひすみ給ふへき所のよろしきも
なかりけれは宇治といふところによしある山里
もたまへりけるにわたり給ふ思すてたまへる世なれとも

いかとすゝきかれなんを哀りおほさ成れしはの
送りひちのまへてめしうきしき川のわくわすそ
しほりのなふ思ひりうなり然うたもあまたとゆくのくい
きん箏もみちれのなりのまゆもんと座ふたよわに
よきさくゆらとくえくなりのめ給よわかのすなしうく
たくこのわめゝ野山のゆゑよもせうし乃人すの
し給いきのしうかゆらかりひきて見給りぬおわ
なうわえわ
うし人をやともまなわよなわれしとなとそ
我力は参ん給わわれんい送ふうひなくうおりしこう
涙しやゆとし山かさな逢る涙すこうふかつる楽候

人もなしあやしきかたに乗乃井なりひゝ成山
うはともめこまれよなれ弟わ浦のうま浦ふ峯乃
あさきかたなるゝおわなくてはりしくろし給すり
これうち山よひし里たちゝ成わさわはこたわさえ
いとうしこくて世乃おん成もう成りゝとおさ
おさおかや送すふも出はらへ是こりわぬさ成よ
これ窓のふくちりきさ猿よすへ給てさひしき郷
さ成りたうと浅わきをさ務給は清文をよかへ
なうひたまの人いぬうとうわやすてつりきの成
峯はまなひえわ給へふすとものふりもきし成を
とさうのいきもいよくしき世乃うわさあふおも

まさりける世中にこゝろ給へはいはち近れ
うへに思ひのかはりはつるかな妻浪かけすこしぬへしよ世
いかゝかくおほされきんゝ世はいてんし給めさき
ならはになんえひさみちふかきちをもりんぬなと
へうそなく物語し給ふのはさわい給ゐ院ありも
こさしくさふらひて御館なとをしへきこゆる
人なりけれは京よ出させ給ひてよりわてまいらせ候
へまかなと御覧してとかき給ふとも御
つまてなは宮れなとうしろくあいけれは御さえ
さとまいらうく物し給ふすかれさなへきすて生き
好への人はやものし給へんふかく思ひすまし

たまへなとまことのひめのをしへてよなんみえし
給ときゝ候はきこかねちはりへ給りけれや給ひの人
とりこの月きさ人への御きたなふ義なる事なり
なとの給ひけれ宮おれ中将も御前よりふるひ給て
我こそ世中をいとも清ましくおもひしりかなりし
をとるひなと人よめとくめしおもいかは清とめれ
くちおしくそすくしくれと人しまれ思ひはり
うくなりしひとりよかり給まうさ給乃なきてやれか
ふとみてとゝめてきて給出家のこ給さしいまと
よの物よ好へなをかれさすに思ひとゝこなわ
いまとあわてゝ心をしき女子ともの御うゑを

えおりひすてぬとかんなけき侍たまふ心ち地うき
さハりなきものゝ音めはやふかさまゝてきこゆるこの
姫君たちのあとひとよあすきてあつひたまへる御渡
小きみひて歎うえ侍るハいとおかしく侍る思ひ
座られ侍るやとこゝろえありめつきは法門はつゆも
給てさ候ひしまれおとろかなひ出てこれ世乃かゝる
さ候えたとくしかるんをなしきからるゝを
おもしのことやうし給めたく思ひひそのことまて
まゐらひ給らんをもしたりしもなくきんほとハ
ゆつる座人し給ひぬなとうの給ハすかくれ院乃
みかとハ十比みこえり抄おはしゝ候すさく院の

あた六条院ありあはれをきこえ給し入道乃みやの院
たゞあし我おもりしいてゝこの君たちをとりわきく
なほあくひつた後小家とおおもりしかは中将乃君
なりくみこのおりひすまし給らん法心うへを
御画しても参りやと思ふきこ給すふうくなか
めいさそおさうのかへまいりなまかなられ条わて
物なうひ発さへくまはうちくすう気さ給りわ
たゞの人なとうらひ給みうとハ御おとはてまそ
衣なほはほ母我人はてよきゝ事なと歎きこゆ
たゞのふて
世をいとふう給ハやまうりおかまんとも座八

こゝの雲を君やさきつふおさらこの御使をささま
たてゝう此き〻の葉わぬなのめなるきは乃こゝろへさき
人のほいのひたまれなる山のけふいとめほしく
猶よ給ひ給て和よつき給ひのかくとしても
かゝりまそりやー給はうへしー
ほとたゝてこ給も世ともふ多けまとも世をうち
山よ屋こ我こそうれのー里此うたなれひきしく
中をしなし給へまいぬ世ありうみのこそ久むと
いふし利ー見御ー説をほさわ中ぬ此君乃たうえん
ふりけよ物しー給なとかつわきこえて清文なと乃
こ給えまかーしきこ給さしなんいとけなうわし

よりひとらわふつく思ひなりゝえさらは世ありわわ
みるかとおかや老わらくしりいとあはれなくわけ
くらしーわきめとちこのわてふるひよるんおほかさ
そらくたくもほうぬ方かしーも世中とうせさ
うかあらんもそいろは八事にはうもとをのはらう
うちは風こまきらえしくそてなんすくしー人家を
いとわわうゝきは有様をうけ給はわつるへしるわ
めくたゝ給ありうけてなんたのこゝろをさきなと
のんゝ給ありやきしーなとかたは歳ゝ西宮世中を
うわさあ此ありとおもひとらわいとりしきこゝ給の
はなそせさゝとも物の方ようまへあ家時なんて此

世をうき物しり思ふるにしあわてなんたり
せんもなきふりきふめはを年まうく世中思ふに
うかひけりをおりぬことハあらしと相伴ゆる
君乃ことにさんたこな世をさんたとわきわ給らんす
ほわうたさことはさんまゐやたいとひえふ達
ちとふとさうり佛なと乃むめおもむ養給やう
ふは有様すそなの清うこう志侍のなるおりひふ
あなひゆくと乃こまつすくなきんちすはふえうく
しくもあうてもぬへつめふをきしかさり末
さうにえとは所ふくおりひまつ徳く誠うへわてい
んま清りしけなふ給の友よこ養いもの一給なき

なとの給てかくこゑんはなきうすゝかよひゝ流りくも
まうて給ふなきゝしよわもけのまゝ入り流ま井
たまの人ふ流まよわけしめてゆとうわかな流草の
ゆ花わよ思ひふしあとう義ぬわかなしさ山里と
いゑとさはうこまてちう給とまわぬへくのとやか
ふはもあはをいとにうまいさみの音波比ひく浅小
りのまゝ遣うらしよはなと心とけて夢をうは
入る八重ほともふけよ近こく吹ゆうひふわひ里
さらふ流れたあまはかくはしもよ想心とまうぬ
りよほしなうめ世夫たちなよくちしてもし給
らんよれ流の世しくふよひたるのきハとなく

座ともしりからくるとは大頭あわ仏乃法へそもに
ふうしりかをへさてく大おはもへへのめやふ御義ん
わらん人ハ巻するたミにわて人の法こ頭ず人をも
みまほしうさひうふいつく出ゆしうまわ座法
けりひあわさま道とさ座うさと思ひけれやて頭りひ
まやまふうくたつ手義こえゝ座かいあくは義く
ゑきな哉さわあことをうち出あされえまんもことに
たりひてやなをとおりひりへして方乃御有頼乃
いと義あるとまん志頭ふとあつひやのし頭たびく
字わ頭つしおりひし座うふうはそくなりうつ座こ
なふ山乃ふ御よ心法文なとりさせさまーけりは

はゝてひとよくの頭えてはのしせよつ人さきんあ座
法師なとハ世よあはうれとはまわこはゝくえう
けに哉巻をなふ志うとくの僧都僧正の義えて世あり
いと座なくさひくにさく頼れ心をとひはつひいさむる
あとくゑ覚て頭えその人なうぬ佛の法てし比
いむこととたもはたうわ乃たう出ちハ御道と然りひ
いやしくこと八ぬ見て出ちふけりもの奈まれたる
いとも乃しくてひふハおわやの巻ことりいと座
なくふとしはこゑあ座うなさまひ乃ねとけちうき
済頼のみなをにたてし作道かくさらひ頭まもいと
さはうふ頼むゆうしくふと乃くはるゑいとあそよ

はかなくるしきさましてその名のひいはゆかしと菜とも
おなし佛乃御名をしへをたのめくちのおおたとひよ
ひよみまをいせんよなくふう義佛さとしまゝはある
人とよき人ハ物のこゝろをえ給ふかきのいのちに
りのしたまふけはきえやうくみなまことわ給たひ
ことりつまよみそてのはらまかしうていのちの
なくなとしてかとみる時を悲しうおもひ給ひの
君乃かくたうとうわ流れ人まいは寂院ともわとも
つまり御きうらこゝとはわて年はなとゝまも
おさしくやまえ給りひいおへしくさひしけなわし
はすめうふやうく人めえる時こあわおわかみに

とふらひきこえ給ふいりのめしうこの春ときゝは
きこえへきさ事ありはきはおりしをやうにもまゐ
座りあるゝ給にもものゝ給よをはなりまはわ給事
ことせはりわかなわぬ秋のすゑほうた四季よあそ
はゝし給法忘仏をこれはほうはいはし法乃なきも
この法はいかくえてしあまし忘ほりなくぬを
とそうのわさわのすむるのこうりまはろひ給て
七日のほとをとふらひ給ふ姉君ハまちたいとへんかりなき
はまくゝ侍さかりそなりめ給きゝ給物の春ひさ
しくまいりぬうれと思ひ出きこえ給ゝまゝに
きのふ乃月のまへ夜ふりくさし出るほとに出たちて

いと思ひてはともかく人なともなく座はまておはし
たれかれ、うなゝなまはは母なともまほらえて御馬
まそなわたわいるまもてゆくまゝ小霧やさうわて
みちもみゝしぬきは木れ井をわきなふよいと何ゝ
ましき風の薄るひよかなゝくとおちゝゝさやゝ木の
葉は露のちわうゝ袖もいとひ座ゝうりひと座わ
なゝはいとさくぬまなぬかゝ命あわきさらゆゝもおさ
おきならひ竹の煙んちりちゝなうすおしく
御行されたわ
座まあらしよきえぬ木のえれ露はよわも岩や
なくも旅き秋なかへそれ山の端のたゝなくもう風

さしとてはいきんの座ともきさせなりはまはの
まかふよ我わきはくさくこりけとあきれのなすれ北を
ぬるゝ志たく鶴れはし座ともな我志のひて此らうい
しなへふよ承く遠な愛清白ひう風よきてさうひて
ぬしきうぬの也おとなく孫さゝあの家ゝうなた命
ちゝくれるかとに秋のうともきてゝもゝまぬ物の
孫ともいとすこきる義ゐはよかくあうひなと
きくをほいそてなくてみこのはしとの包れ名たゝさ
もえ我うぬうしよ起おわなるへしとおりひ時ゝ
いさ竹へえ琵琶乃ゝ忘乃ひゝ北たわたわりうきさき
てうりきゝへさくよれつゝ乃のまきあまきなまと雨

うつすやうにてかれぬこゝ地してうへなるをはちの
ごとも物きこえなりおりはしさう此ことなれ
あはれいかなる事しつたえくゆめ思ひし事なれはまの
はし事ありしのひたまへとはけのひちるくきこゆ
はきて殿舟人めくそのこなきのいくなしおもひ
きこえまゐらするはなんこりわおほし遊し御きよう
そこを拾やうにはゝをめとやさなるうはしらあれは
わらはをこなひの程をきこえられしすこさきんなり
何いかしうくぬき逢しく来わていらはしたのへんくん
うま道へ姫君の御かさる冥くえて見との程はをは
あんなくうむへきとのたまへはみ心くさおなうち

はなんて十さを侍らむとそこつを志はしやとめし
よるさて年ころ侍人はそかのえきこてゆかしく思ふ
はしとれきとも姫られしきおわりなしりしはう
たちかくまそききへつよものく由わりやはよなく
さうしもてまいりわよらむかと見姫あと座め程てえ
いなしかいなりらむやしの程帰けりひりたかうちの
さは姫しくきさきんちゆもいとあそたくのうけ
なくおほゆきはひと歳りぬ附えわけるまゝくなん
あうたせとしも人まそあ喜られうさよわ来わさう
きうし侍人侍るとおえをとも世さ敬程りん大うた
かくて女君たちおりしまいし事なははのくさせ給ひ

なへてのひとりさへせまりしとおりし乃路ハ
すゝとやしきはうちわうひそかにはかなき御りの
かくしかしの志のひ路なきと見ゆる人きこゆるた
世乃なかしけり来り出へてのめぐみなをとの路ても我
さはへきよ我ハ浅く〳〵志さきらう路なとなき人う
かくてかりしまほらん佛のみ顔のあやしくきよ
なくさふおもひ路り出なかとさきよ座のふ乃路へハ
はなうしこ心あやうよはの斎こやねらむとて
おなさのたきの人へえさけのすりのいしこめて見飛
へうそことなは我年しへすきたそまほまわ御
とも乃人をかし乃程うよふひすへてこ此處の人

あへしうふおなるよからふ庭のめぐみすけのいの
ちをはしなし何きてみのまへを月あらしき
かとよ雲わるわる我なりめてすう八我見かく
きの紀あけて人く井たわすのこふりとさむのよ方
あうくなんへくめぐみわうハひとわおなしき夜なる
おとなくと井なわうちふ遊人ひとわかそりしらに
いうし井のくまて琵琶をまへり抜きてはちを
てまのさくわあしはしぬる遊り雲のくれうわ行る
月のよはうかいとおりのきうし出れハ扇なりて
うれしても月そのさはへてのの里のわとよそてさし
のうち遊うおいへしきらうふけよ白ひやかな遊

面しきひめしたる人ハことのうへ有かくさき
あくまて以日を海道をちこそうのわけまさに後こと
かも思をよひ給けるほの風にそうちわるひたる
釜りひとほこしをもつこりよのしけむすわをよりは
ともこゝまてる月りそふ涼く物のふなとりの家よ
すをうちとけの狩のはしにはなる御登りひとも
さらにようも思ひ屈わしみはよひいとほのまする
なにしうおもし着物袴などありつるはけゝへて
まつめて世房などのよ母裁きくにかなうはあやうの
すをいひすゝきしきあのうわらんやうにゆく
そしそうらるゝをくゝま先だはものゝく後たるへき

世なれぬれとこそ候すまじきぬへし霧のかゝりけれは
さやうにみゆへくもあらは又月さし出なんと
おほえありおくれうちより人おりけはからはきを
かゝとふひとやはらむすゝれおろしてかいつまぬ
おし渡きかかめはらはさうやうなもえなして
屋せうかくれぬるけらひともきぬのをときはいと
なよう心にくゝ候しうそいうしうあてかにやひ
なはをほう雅とおもひ狩にやすゝたち出て京
御車寄せて乗はへく人えしゝをはあわつかに
はふらひりあわあし車わ侍るはまきとなりく
すまゝしくおりかくことはしなくさあてなんりく

さふらふぬよしきこえよいつかうぬきまみたるかことも
はくさをむしとのゝきみへハまいりわく義ゐうく
ゐてやしぬらんとはおもひもよらておとけなわ
はなす姫をきゝやし給へらんといふとも？
ゑほりしさやしくゆりしくゆふ風の吹はやふを
おもひのけ給はとなきはおもふ給すさわにほたちう給
ををうさちゝとんも候とひえちかなそうきはなさうえこ
なとも候さふ候人もいとうぬくさき人かめ候を
おわうこりこ義とよ御座のすゑとありひてきゝる
きわのまさきこまとなき候はおわ候ふ乃きの人はおゆかん
いてしつ井の姫屋まて思ひかふわりの人ともはさし

いつへんこゝろおやにも先たて佛志をとゝまらせし出る
こ候もとくしえけなかこのみまとひおゆはりした
なく候くわう地つきにあさ夜ちゝ候えうわすそては
おくもたつまのいのちましき座まのうけちり思
たまのふ給をうきまにおとりこうゝく露なよたひ誠
かすまてはさわとも涙ゝ流しえるらんとかん
たのもしう候るといとまあ座のうりの給わのき
人こ乃かふつりふ物義にゆへきもかくきてかへわ
うしやうしけなるこそふらういてくなまは女房の
おくふの義我たゝし出るかとひさしく誠てまさきと
めいる候もしきしうそなまうも思ひえつるぬゝおほへ

みてこそわかれにかもいつし歳ごとゆへくといとよしなき
あてなるこゝろしてひきいわなりけるかれうふの於
うけこわなりしうきをこそしらるかな身も世のはかなさ
と思ひ捨へきよとひと訴しもはかりなきかなめうきを
於らんこうくちおしう身へは道有りこうさうす於は城
思ひ出ましさ於時はまみなとみたくひきさへこそえ
さを於傷さつ於のうちいなりすもさてしく都
そうられ侍きはなをかくさのひ侍のわ侍るかつさ
あさしの袖もけのを於りんこうひを侍らめよれ
つまれは美しくこきすちにはあかしうそらは
へくやさやうれうたをわさともつむる人侍るとも

かひきへうもあらぬここ於つゝよさかなかんなのはうう
きこしめしはいすふやうも侍わなんはまさしくいふ
のこすくし侍ふ世の物語もめてこそはふたのこ
やさしさ数みのく世それまそなのめはも於ふらん侍
こ於の袖まうりしふあくしもねと於みさ数語りわ
きこえなき侍るはいのかに思ふこ袖なり侍らむなと
おほくの於へいつくしくいゝへふかくて於うし
侍るおい人此世者なるまてゆ侍わ於たとしへかく
さしすくしてはなるらしをかやあゝ侍るかさき
おましのさ袖りも侍ふる風こく此うちなりこそ
まつきへてはものかとさてぬ尾になりしうなと

したくのあり明ふかき比さへ其儀ことはもうらめしう
いとくるしきはおもひとてもあやしく世中に
はまり給ふ人のうへにもあらぬ御有様にそさも
さぬは若人ゝたまとふらひのまきれ候へしく
あさましきのみなりまさる侍めるよりかきかゝさき御
うら給ふしのうとやかなるにも侍らぬうちにもおき
ましてまて思ひまいらせさせ候ふをうけたまはり
くちをもおかしきわなりつる家へ御越給ふへくきまや
侍らんといとはかなく物かたりなともなくき
ものうき思ひいたう人めきてかしあはれに覚なきは
いとゝろ浅ましうぬきもちしはへりけるかしこ

はけにひとり給ふなかより もろともに思ひきこえ給ふ人は
ふれこゝよなりわきわとそよわの紛へはさまれ
うちよわみまさりけるかのやうくものいろかの
はへりきよ屋はしたまへはところふうわきぬ
さうさのいとぬまさしめわたるほとうるてこの世の
わかのあれひまやとあやしきまてうかりみちうわ
これおいへうちなまぬさうすさきたるはかんもやと
思給へしのふきと先なる世の御物語のいよ
ならんはいそようちいさことをかさはし我も
うきのめてしき給しめさせむと筆はまんすの
はいそてありもうちまさき思たまへんわさ給へるしもや

うれしきおりにつけてもなにはにおほつれ流よ
かきてえこそ出さゝせ侍らしもとまちわなみのき気を
まことにいみしく覚えかしと思へるにおかうこそした
儀する人も流も法なふとのとはみきて身をすへき
ゆとおりしも思へはもあやしうかわりて家よ
かくきのゆる事をたひめきもわぬる給りく然ころわ
所へふ人もなくてこそ露のくふみちの程にひとわ
のこうかちはほうきしきはゆそなめかなるりな
のこひ給うしとのさまへいうし給はいそしも
侍らしめし又侍ふとも歌のまれほとえらぬ
家乃ふれむ八歳なりも侍らぬをさらいたく分る

ゆるものの世に侍るくわとりわきゝ流しめされ侍らむ
三条の宮り侍し御侍従のきのつくなわ侍り
くはとなれうふきて侍しうれのみむつましう
思ひ給へしおり頃乃人おかくうを侍りける
世のすゑよりはかなきをすいまわつこりわまうて
きてはなとを六とせれ程すんこれにつくとふらひ
侍るまろしめさしうし出ら後藤大納言とやすなる
ほうのうえの衛門督よそうくれ給ゆしはものく
ほいそなとよやほほうんとてきこしめし侍らふ
こともはらむ儀給ていみしくもへだてらぬんち
のみし侍るうれおりのあはしさもまうて袖のうれく

おもはれけるはおりひめへかへるゝ我身をおもひてうらみ
けるまゝはうくおもとおもひしをなから世をはなれ侍りけれは
なともし露のきの此座うかなんのの大納言乃御
めれとかけしその母よなんけし新の口り
はゝうまのはわかまゝけし人かとかもけるぬ身
なまゝと人よ去りてまゝは侍ちゝ給まわかかこはまわかな
事をおわくうちうはめの中一我いまゝいはよ
なわ我めしは病此すゝつうさめしよすきてははくら
の我をくしとなん侍し我きうしめは〻身ゆへなん
一たとけまゝとのかりわ宿へ出侍るりかこのかをと
おかしめはゝ給侍らいのとうかなん我うしめ

いそかぬへきよりのさ人ゝ〻まゐらせられたくさうし
は我たわとはかしろひ侍めるかもことうわかなん
とそさはりようち出来となわぬおやしき殿のこる
うせなきやうの物此ともは深うなわはらん座うり
めはうかおかさ給まといのまゝ侍りおかつのなく
おかしわさはちとのすち我等〻いまゝいにとおく
ゆかしけまゝけよ人めもさけしさうし〻小給
物語りおくは〻ひそ我をはりしれてんも〻
さちしう給へ〻まゝはうこそうゝ思ひわくうは
なま物うらいよし人の事と覚侍ともおかしう
なんさうらいかなゝれこ此我わ我うを我へ露わまゝ

ゆふはえし気色なりけるに八幡の御前に参りても猶くもり
鏡にしもうつめられぬ色まことに哀なる程は思ひ知らぬ
心の花とはかはくちはてしかなんとてたちたまふに
うれしかりしまんまるの鏡のうち思ふにやまさてきしか
かもふうくうちわらひさまのの御へ雲井の御前
へつそれ御法を参ならんに御ちの御着たちまさに御乃
うちともん人御しうなるにさなかりしつにしらん
あらいとおくまわらぬまへふもあとりまうしなと
おほせ
あさからぬ御気色にて見えさせたまふに　こし方の木の
松山とききわらうめてかわんかうくれ侍ふうちにとたち

うへわたりにひへさまへ御さ候を見きこえの人々のめなまま
たるたまおいとことにおりひ幾とせ御ゆきまいるそ
いるくハめはらかうえさせむはかへわやそつらん
かくなる思ひのれて例のいとつくましき事にそ
雲の井御峯のうけ給はせ御気色わのいとく
へつらはふこ給ふにもあらぬはしうちかけき給へ御
くしおきうちに参らわ何事かあるおしきかし
みしぬ何ことにまとけまに心しきこえとおかしかな
かもありはゆきいまはかりのさおもてなる
んちしてなのくなかふさにうけ給りるのましける
そおほつ御のうわいとほうしおもなまさてこうつは

うらやんやかえさんは御かめまもさ法ハかく世乃人めいて
まてみし樣へハ思ハしは小袖おかしまうさわくわと
うらみしうなんとて我ぬ人の志保らひを法めし
おもて小おりしてなのめ路めし給ふ人をはりし巻
なわされと涙莫をもうぬまやはらんすさ成しけ
あるくしきなわと佛とも此人くやしけにていふ
わやしまよ母ともうり案りわ侍りたるのくなまと
なまま世のりとなまとも小りうふさまよともみれりの
身よ乃乃うんようひと法たまこともおりんへハおもし
すぬるよ此涙をなさなわわまハうはまたまの
うれなよ志保くるよ男と思ふへまよ世のはと思ほりけ

ら法砥免してはなくうまきさこえ路之
れし此女此もう涙をまことてあかきさんは母乃
志保ならふ小袖をぬまぬきなすのめ路らんしとて殿の
人小もさせ路へまことむくまハ離くまたるのかしそ
まてきの以法佛無のうんのれしとおかハ涙をなつんハ
そ侍りしきをな法をとをきし機ハかく法おわハとて
さしかんふま治の河むさあさ夕乃雲や
袖をとらしりし侍らんあさへうきてといとおもし
のよう義樣へまよかくよめやすくも此し路久わと
んとまわぬまとは車のそ案わぬと人さはりし
此色まと我ぬ人りわ侍かしまをてかへわわるきを

おりんほとふかゝなるは楽はへしなとのおぬまたなる
はそともかしこの人よぬきつけおそとわにつかりし
はやふはふ御しかきわりへはあかい人の物語こそ給に
あくやまそおかし出るなわりひしまれいさよなく
夜さわさくおかとらにおりしつまつゝふは思りひとも
おもうけようひて御思ひそ参会からさき世風くわと
こよはゝ思ひしゝは文書わおけさうたちても
はらはこ御さきさきしけれおはきらしふ御よ参ちひよ
はくろひえらてすゝつふえ所はわて御義おふうら
つきをなやふさ夜よゝや此るおいかくかゝめ侍ての御まへ
おかつ御もく御し先まさきみなんうさりし宮へ御き

はる座うふとよのわいみまとれまゝんも心座はゝおかし
ゆ御すへゝなんは山こもわたそ侍るむ日数もうけ
給りわ御きていふをうつゝし露のまゝすひもそふる世
侍らんなといとすくようふの義給へは右左乃おもう
みる人は使まそりれおいへたつねて御ことゝもとうせ
ちとの御殿并人かさむけまそはまよひしなと
忠よおかし座わておかさなれひまわこやうれもの
あまるをさ勢給又乃日の御するみもきわ給やまよ
これわの備ともこの御給れおうしまはゆとこ給
かつき御しつむ御さそおりしまいかと乃ふきを
給ふへまうんとおほし座わてきぬうさなとおほ

うれくわはたまふひそてゝ出給はしたなかくるまは
まうるひ人ともふわさきぬけきう給もなとすへて
一ゝとわのほとはしあはおほかわの大とこたちり
たまふ殿井人のれはぬ義すてのえんよいゝしたる
うわの御すともえふるぬき候きなやの御させ
ふよくくといひしゝはよかへ給せうほしきそ
男女たちえうんぬるの事はふはのはしうゝぬ
袖れの女人ことふとうのめゝれめてらるゝなん中く
とう給をうわきるちう給よまうきそて男女座はくも
ふ給まゐりまたいたしも御覧まゐそてひとのおとう給く
自ひをうしなひてりやとおもんと歌ま義人の御

う得まゐりてえもさゝさいそてぬうはまうまたは給や
忠く非君の俵西うへいとめやすくおあうし浅はれ
おゝしくみ給ふやうもおかく候きうそこわらきなと
人ゝ思ふうを御覧をさうはまはなうのはんさう
うちてすてふい給らんも中ゝうさてつゝむまほの
わうなる人よ似ぬ御あつ候えく人ふめ給となりつゝむ
猶もなとひとおとさちおれめしてうれさやう
まそ心はめそめたゝ世ふとの給くわは候ゆはりくも
さ候くれ御とふゝひの山れいは座よはまゐらし
事ふとのつまへふ小まゐうてんとおりして三の宮
おやうりおくまわたらんおたわの見海さるゝきん

こゑにおもしろへかれとあさましことありうふ
のたまふ物をきてこえけまして志佐はいかし
きこむとおかしてのとやかなるみ若ありきわ
給へ里まちのさ衛くなる法輪院寺ことかりし給
つ舟てありま治のみやれ志とうさわいそくみえし
わか身はかはまうとゆふしくゆめえ給ふ定いとと
をちよゆりしとおほいとわされえよとはなしき哉
みそいとくはこ旅うこ我ぬへくいひはく憂給さて
うれあわきん無事とハなきかみを給ハさわしのみ
なるましうはとうるみ給はかしいとこさ衛く
御涙とへかめおもし哉なよみを給ひぬうれ

わかみハかくいとゝむもれゐてさふらひしかはしめて
やむへき我身ひとつならぬ給ハかなしく御らんせ
さ給ひやと思給まとひてたつ事を給へき
うやは我なとこそはのおかしえはいとよく過ぬ
へき世よ侍るまゝまちかく給へはおかのめおのな
さふらひたりえ一所あわぬへき我母の物思りしきうち
志のひさふらはすとも山里めいさふらはく候なと小舟の
はかゝ侍へてのめわたらのきこえはまさわさわきいと
よはかぬひし里さ衛ふそうちくさしそあらむと
年比思はなはかわ侍てみてをたまこうとらめ侍う
さわけをみのうなかし内裏のみをとかをはハ

まかなかんりやきりひ宿かへらさりけるかたらん事う
わろまほし花籠ともおもひ侍へれなとうこえ給ふ
まそく花のあたちていとあさきおかし給けの人よ
んうつぶきし人のうちしかきあり人に城を給ひ
ならし此比のしう御用ちとかまかなくまかわ給ぬ
給又こよく巻まふみ給へと人城をさぬ給て給まわ
御供侍りわかのともるけに城りとえしさまて
心をとみしとおもし九たおりしくそいそやまし
なくう侍えり世中に心ととえしと思ひ給へふ
やうあ御わかくなをさうわらも侍くましう侍を
心なかうれりぬ思心はよりあなとおかなる思ひ小

たりふ庵まする なんなる八歳と此え母まへはいそ
はなちとく志さまたに乃おと給くし歳のりまさ
うと義みもてらしう那とてわらひ給ち御乃うち
みれうの小原人民ほ民ぬうしすちなと乃いかく
うちおと給ふきまそへの党給るりおりしとこなく
すもめやひしときくわうわも何はうわ心かも
ときまうさうわうわ十月よみわてみ六日乃ふとあり
まは治へまうて給わし給をうこの給ハ清銘させ
めと紫の御ふ人くわきとゆうはすれひをむしり
はうふんまそれし給ふもようん此う歳ひて給て
う給らうまわし給車まそかとわの寺はし

ぬきぬりきてしとさうひゆまんへつと宮まのちよ待ちひ
ほそあまつきたるはわかしなとおかしうまつりし給
くまぬまきんおほとなふらちかくそさゝくみえし
竹へに文ともみあきなとわさわさとさうしおろ
しておなと心つきほうちもまところはほ風のいと
あつけしきこり本意のちかふたとゑのひゝき
なと花もはきて物おほしくら後ほうな頭乃さは
おわれうたちかなわぬらんと思ふに猶よおわし
志のゝめおもひ出られて琴の音の花におちと乃
はいてつくわ出てはきれたひ霧りさのとはふれ
待しのあのまれとめほうしき物れ音ひとこ露

うけ給はりしのこりなん中にふかいとはふのしう
おもはおもひ給へらるゝなとやさし給ふ線もうらをも
思ひひそてしはせうしきてしこともうれしくて
らんとのこまんへと人気して琴とわりきていと
はかなくなわふたわやまふるへすふ物の音よつきて
なん思出らるへてのつるはなとて琵琶気して侍らう
とようのうし給ふとわて志るへ給さうりうの
うふきて待しおあし物とも思給へつゝ過さわたふは
ちと乃ひのきうまやとこう思たまへしうとそ
ふとけてもりきさふそ給りはいそあふさうのなや志よ
はつへてとまのふたうわのてなとかいはくまわのきらて

まてハつくりかこんあはき――きたりしとなかこそ
菊むすめの老なかり――なへはかりとほうまでにこそはし
かこへは峯乃松かせのおとりやせまほへ――いと
たとく――かなしかめさなてきこえなくあはま
ひとかたならそ座めなけきのわかれありかなし
なくてかわりくものめくさうけことの孫こちんえ
うらはまやときくおわかれまでとさなとしめてなとも
あらてひさ――うなわふきかやきこえなきよまのさく
そのくうきなられへのめはいかなるりわかやうち
わりれらんなかうものくちうふれけるのくう
なとことまうし――となんかなしとしてまさふらし

なへとおなさふきこえたまへくと思白よしさわ――
ひとかとをききなるんさまあはれ物をいとかされ
なしむゆくひさいるまつて大なる寿なりけれはひく
うのゝ――やすえなくれとうくなみえとさひてやかん
なれぬめ達はいせくちなる――うおほゆかれはりてみも
あくあや――うよほの無思ひ座わかれてすくは有様
とも乃思ひのすのなはかなとそ侍しうおかい
うか人はたまいりのてまうさしとえなくことはくると
きふ河にとも去てぬ岁乃ほわすくなましさにのよ
ゆくすゑと残き人ハおちあふまそさはるへんうと
これ乃見しうけは世をいれきんきうハ乃かうなわ

されとうちかへらひ給へは心地しけり見まかりて
まきとの御けしきはなちえかたく志やきすちあり
ねかはくはともかくもしてひとりにおはしめされむと
なん思ひ給ふは志りしとなりけるへ侍らん余此程は
ひと日ともかくうち出しさきてんさ侮とあかへ
ねふきもなんなと中程へはいとうれし此事と
おほしの程さてあのはかなき空のはかなかひ志程
程より此かい人あしく出てあひ程へまいらせぬ君の御
しほとありてさふらふを程毎の恙とあいひける
年は六十よはひしたるぬほとなまじと空ひのあり
ゆくへあなかきりひしして物なと我々御前権大納言の

恙のよゆくも小物を思ひはしく病ははやきにあらくなか
程よし有様を写へ出てなくことはかしき程よきの
人のうへと浅りんとは先なほへきさ小能ことゝもを
ましも年はおほはかなくゆうしういのなわれん
むかとのはしめかなと仏にもこの事桜さたうふ
志ゝきを給へとあんしけるよろしまやかく夢の
やう小若なふ着からわをおもわしぬたいてありきて
つきはしむともほとよなみさゆくめかさうわれわ
さてもうくうれよ此心志わたる人ものと里程へまゐ
くほ哉めはしうふもそ侍りしうもあかゆるうの
すちよ程うくいひつゝ奉たくひやきのこともあらむ

とにかく後のけても要なきよハさわ名をとの妙へえ
小將從も許とえあちて又さ傳人ねらし見ひとしく
まそとも人よりちまの兒ひ将らすらくもみたりの
なく殺ならぬ身のほどよ待まうに傳ひさうの佛し
つけに住ぎ文書わさ待しつはるの法うらものゝ氣色
残も見あわせめし小法んよわほまりてなかし
名所時ゝたゞふわ此中よなん玉さの乃清きう
うこ乃かゝひも待しあらりいさけまいまりしく
此ときを法ともののちめよなわ路ていさしこの乃路
なく事の待しかく所多めハ残き所なくいふさく
思ふ妙へわうわ法くいのふしてすハきらしめし

法ふへもよいふりのくしうらぬ志すのほいそ
ふも思ひたまへ法るを仏に世よおけしまうしなわと
なん相りふ路へ志わぬるに法鏡世法と八まりのと
将わともいふのハ底義も様将なんうの般多乃岩を
志うぬ身のうちにのて将なハれちく所居うとこうと
いとうし後めさを思路まとちの宮わくわも時に
かのめうを路をきちいそてまわしらハ法しふ此
りしく所わわもやと忘し将わ法るちうら出
まうてきそみんさうふこまはゝ此世乃山とりも
将らしとみくくちまう小生まと路く多さ推乃山とと
まくおれし法く此佛むみしうなわ路しさい薬ふ

母なり侍し人尼に成りて病つよくて身ともへにかくま
侍りしかはいとゝ思ひたまへ入侍るに藤の衣をたち
かさねまし(き)ことを思ひ給へし程にとしころ
よろしからぬ人のさしきを流きたわかる人誠する
ちちてみし乃浦れこそまてとりもて法をわかし
うゐ京の事こそへはとゝえて是れ人もしこまそ
う世侍りし程十とせをはまてまそならんあらぬ世の
くちしてむむ法りのかわかし越ちのうや
ちかさなつきてわかいまわ京わかならふゆく侍
うはしくあり世にまししふへまさ法のも侍らぬを
浄泉院の女流とのへ流りとなとく衰へは着きてな

まわしわさとこゝにまく京わすふへく侍りとりした
ふく若くなりてえそうし出侍りてみ山かくれの柳木に
なわりて侍ふなわ小侍従にいゆりうせ侍りりん
すれかにしれのはりわとみ侍りし人は数すくなく
なわ侍まるまふ末の世れありくの人になく法を京をぜ
うなしきゝ思ひなくてし拙さくとりなめくらひ侍遣なと
我ゝるふ程よきみのあけそぬまかりさうはこれ着
猶侍るはさぬすへうなんありぬみ人数のぬ御名は
とゝ流まてきこえん侍従といひし人は前のうち
おかゆかいはゝむつかはしかしまし程まや猶ま
むすをやゐてうきゆきとなんきこえすらにめんめん

なくてはかなもさかすて色ぬへつかさとゝろさしもとなと
の給はゝやうにをしきの記おもきをさしはかくとある
うひくら義をふく語はぬひいまさしはとわ出てまは
おきんまそうしありきを給く我給いへくもわうは
なわゆさわと乃給いきてこの清文をとわおはあて
給ちをぬましのは小侍従よみあひ侍んはいそに
さきたりまはさへ案しきんと思百首へし残盛すて
おほきみしもいさしあとゆはおかさりなしう
なん思ひ給ふふと我こゆはまふくそこまいのも
給つかやうれ小宰人いとはをかうまうやあやしき
うつりたあしりいひ出らんと侍しきあほきと

迄ともちうさぬうし残ちのひはゝるさもやさとき
おりひみたまたきの御ふ御しうゆこはいひなと案わ給
君のふかいもきまれ日ふわし残ろふいうちの清物
いえもわ義ぬらん院乃女一宮ふやこ給はとふひ
すり出案はへはきいうさくいと海なく侍ふをよ
ものこ給はくして山の紅葉ちらぬさきさりまいは
へまいりしきてこえ給かくえはくふちよさきひ
うわふ山のうけもほうし物はよらむるへちしそ
ふむなとよ給ひ些こ給かへわ給てきの御せ物を
みえ古きりへてうつのふきんまう残よひて上ゆう以ふ
もしをうんすうまさわかうきゆくしてくちの

かゝるをゆひつらにはなのみやこにはまふわかくらを
おそろしう覚え給ふくのかんにてまさうにかよひ
くらはぬこの世をいつくむはうあらさそいれ
侍てうそ痛なをもきおほかはよなわふらなりみ
おれのかもゆかえむ事うくなくなわぬるをゆりしう
思ふうりいそひにたわはおふちものはなてありし
まんらんのさ海くうれし姿うをみちのなるは
おかんなむ教りつふくとおやしきるれはとの
屋うかのきて
めれきんよらの世をう世く君よわもよ有り
わう海しむうのなしきみうしふめはうしみ姿く

侍るこ葉のほともうし海めぬう思ひ給ふふかうゝハ
なかまさと
いのちあらはそれともみまし人ま氏ぬ君をは
とめし松のおひすゑうきさうしふ屋うりいと
みたわうハしくて侍侍乃君にとうへよはまきはき
たわさんと以ふむ山のすゝうりなわてふなめき
ふ海うひくさてなうるおんハきてすたゝいまの姿
たゝ世にもゝのそぬ二お数ふともの志ましくふる
さたうなかを見給ふをうおちてまたくましうはと
う海めとうひと御しき事ともなわかるはす
世にまうるおふむ屋とんひとんかいとく物思りしさ

すゑて国へ帰らむと思ひけれははゝもおたてまつりさの
御まへ尋ね参りける時へまかりけるとはゝにもみなひの座う
あはれさまに思ひて語る事をはちゝひとりてまかりし
たまへへ入つる御のちたちにてむかときゝしらるゝ事ゝむなと
心まよひてよ後月にあるひへまかり入ぬ